

目次

巻頭言・不器用な学生に見る教育の未来 ————— 1
■特集 2019年度卒業制作 ————— 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11
事務局報告 ————— 11
連載・EDeye 住まい方から考える 多文化・多世代共生を一步まえに
II部 事例紹介：もうひとつの住まい方 in えどがわ
————— 12, 13, 14, 15, 16

発行日=令和2年5月26日

発行人=

清水泰博 yas_kiyomizu@yahoo.co.jp

編集=

上綱久美子 tandk@sepia.ocn.ne.jp

小泉雅子 koizumim@tamabi.ac.jp

佐々木美貴 mikisan@blue.ocn.ne.jp

山内貴博 yamauchi-t@kyobi.ac.jp

◆日本デザイン学会環境デザイン部会事務局

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

東京藝術大学 美術学部デザイン科

清水研究室気付

TEL 050-5525-2206 FAX 050-5525-2496

Mail 平松早苗 jssd-ed_hira@mbr.nifty.com

巻頭言

不器用な学生に見る教育の未来

中井川正道 (京都美術工芸大学)

今の学生は我々の時代に比べると、体を動かさないうえに様々なものが手に入る便利な生活を送っている。折しも、学校という場においても新型コロナウイルスの影響により遠隔授業が行われており、まさに、一日中家に閉じこもり、屋外に出ない、体を動かさないという事態が起きている。まるで体を動かさない未来が現れているようだ。修練した時間が技量を高めてくれる美術の世界の教育、とりわけ学校での教育は今後どうなるのだろうか。学生に対する教育がこのままでよいのか、悩ましい時代が来ている。

最近、工作の道具をうまく使えない学生が増えている。カッターできれいに紙を切れない、釘を真っすぐ打てない、ノコギリを真直ぐに引けない、鉋は知らないなど、道具を使った経験がほとんどないのである。当然作品の出来栄は荒く、作業機のまわりには端材が散らかり、材

料を無駄にしても平気である。また、工作の不器用さに加えて、面倒なことを避ける傾向にある。例えば複雑な仕組みや構造が絡む機器や自動車などのプロダクト、多様な機能や生活スタイルが絡む空間系のデザインを選択する学生が少なく、小ぶりのパッケージや雑貨、文具など、単純なモノのデザインを好む傾向にある。卒業制作にも、こうした不器用な傾向が表れている。例えば試作せずにいきなり本制作する。また説明パネルや模型を無駄なものとする。さらに社会性のある面倒なテーマを避け個人的な世界観での提案に終始する。

このような傾向には様々な原因が考えられるが、掃除、洗濯、修繕などの手伝い、庭の草刈りや地域清掃などあらゆる生活場面で子供が活躍していた時代に比べると、幼少期にそういった機会が減り、道具を使う経験を積んでいないこと、初

等中等教育における美術や技術家庭などの授業時間が減少したことなどが主な理由であるように思う。

美術系の勉強は大なり小なり修練が必要であり、当面AIやアンドロイドにはできない部分がこの先も残ると考えている。とすると、究極の器用さを持ち合わせなければ、今後の社会で生き残ることはできないのではないだろうか。また、脳が手足を器用に動かすように指令するためには、多くの体験の蓄積から得られる制御力が必要である。家庭でも学校でも手足を使わずに済む現代生活は、人類の進化に明らかに逆行しているのではないであろうか。今、手足を動かせることが当たり前として実習授業を行っているが、逆行しつつある世代に今のままの教え方が通じるのだろうか。修練や体験を今以上に重要視した新たな教育を行わない限り、これまでと同じ程度の作品を作ることすらできないだろう。まして、国宝級の作品や人材の輩出はますます難しくなる。あらためて美術教育の再考が必要な時代が来ているように思う。